

「今日の説教、聴き手のために」 (講壇-15) 2015/5/17 明治学院教会

「すべての人が食べた」

岩井健作 (前牧師)

聖書 マルコ 6章30節-44節、

「イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡して配らせ、二匹の魚も皆に分配された。すべての人が食べて満腹した。」(41-42)

1、「貧しい、って」どんなこと？保育園の子供にお話をした時に聞いてみました。

「御飯が食べられないこと」という返事がどっと帰ってきました。そうです。「すべての人々が」みんな御飯が食べられる社会は、私たちの究極的悲願です。キリスト教的表現をすれば、「救い主による天の祝宴」にすべての人が与かることは終末論的な信仰です。横浜寿地区の諸問題への取り組みの中で寿日雇い労働者組合や神奈川教区寿地区センターが「炊出し」を始めたのは1993年です。「第22次寿炊出しの会報告集」が教会にもきています。「格差・貧困」には政治の酷さ、経済の構造、社会・人間の問題が当然あります。一方で多面的闘いをしながらも、足下の共に「パンに与かる」(飯を食べる)「炊出し」を祈りつつ取り組んでいるのが関係者の日々です。

2、今日は聖書のマルコ福音書の「5千人に食べ物を与える」という物語を読みました。「この種の伝承の成立基盤には、日毎の糧に事欠く民衆がイエスに託した希求があったと想定してよいであろう。教団伝承として成立する過程で三つの要素が加えられた。第一、旧約聖書の背景、列王下4:42-44、(エリシアが20個のパンで100人を飽かせた)。第二は、礼典的要素、聖餐の原形が予想されている(MK14:22)。そこには礼典的な言葉の強い響き、「・・・彼は(天を)仰いで・・・祈りを唱え(パンを)裂き・・・分配された」がある。第三に、終末論的要素。「天の喜びの祝宴」への希望。この要素が中心になって、伝承が定着した(荒井献「イエス・キリスト」p.265)とされています。

3、マルコにはルカ、マタイにはない表現「飼う者なき羊」(24)があります。民族の指導者がいないイスラエル全体を表現する旧約聖書的術語(民数27:17,エゼキエル34:5)です。「青草」(39)は詩編23を想起させ、牧者のイメージを与えています。この物語(供食の奇跡)の一つの機能は、人々がイエスという「真の牧者(羊飼い)」に出会った事実を鮮明に示すことでした。牧者は「一緒にいて、世話をし、魂のケア」をしてくれる人です。マルコは「イエスとは誰か」を追及しています。ペトロは「あなたこそメシア(救い主)だ」(8:29)と告白しました。でもその中身が不鮮明、また政治的です。イエスは「パンを分かち与える」奇跡を行う牧者だと、この物語は明確に語っています。奇跡は「不思議(miracle)」ではなくて「驚くべき出来事(wonder)」です。それは、「パンを与える」という礼典的意味をも象徴し、天の祝宴の予めの表象でもありました。その様な、全体をこの物語は含んでいます。

4、日本基督教団教師北村慈郎さんは、寿地区委員会委員長です。つまり「炊出し」の元締めです。礼拝に参加した人は「すべて神に招かれている」という理解で、担任している教会の要請もあり未受洗者を含めた「聖餐式」を実施しました。そのことが原因で「教師免職」の戒規処分になりました。受洗者のみの「聖餐式」はそれなりの意義があります。でも「すべての人が」与かる聖餐式の聖書的根拠がここにあります。